読者のページ

『スウェーデンの老人福祉』を読んで

緑政局　大島千恵子

私が常々老人福祉の問題に関心をもっていたのは、誰しもが年をとるので老人問題とはけっして他人事でないというごく単純な理由と、自分も将来は、今は自活できている親を何らかの形でみるようになるかもしれないという予測からである。

論文の筆者は、市役所で老人福祉の仕事にたずさわっている女性であり、自らの目と足でスウェーデンの実情を視てこられたということ自体にまず、頭が下がる思いであるが、その内容が、日本の状況と明確に対比して、女性の視点からも多くを綴られている点で勉強になった。

スウェーデンでは老人は若い者と別居しているのが普通であり、人々も自分の老後をそのように考えているので何の抵抗もない。病気の場合はもちろん、健康であっても、老人の経済的・生活的独立に対し、国家はあらゆる方法でこれを保障し、老人は医療保障を含め、最もよい環境を自ら選んでそこに住む権利を与えられている。老人ホームという施設に収容する考え方は、近頃では否定されている。

娘が隣に住んでいても、老人に必要な世話をするヘルパーは決まっているので、親の面倒をみるために娘が仕事をやめなければならないなどという問題に悩むこともなく、娘は娘で自立した生活を営み、老人もそれを当然のことと考えている。

私は自分の母にこのことを話したとき、「嫁姑などの人間関係で思いわずらうよりも、ひとりで暮らせるならこんなに気楽なことはない」という思いがけない答が返ってきた。大正生まれの話なら当然日本的に、「同居が当然」と考えていると思ったのに、その母にしてこうである。日本において同居が悲惨なのは、老人の側に生活的自立の条件がないからである。

スープのさめない距離でそれぞれが自立しながら時々訪ね合うというのが一番いいのではないだろうか。「老人を見とるのは人間的行為である」という言葉を聞いたことがあるが、人間的行為ならなおさら、それが嫁の手だけにゆだねられているのは、どうしてもおかしいのだ。

『役人になってしまう』こと

民生局　原　賢

しばらくぶりで同窓会なるものをすると、それぞれの分野で職についている同窓生に接することで、自分を知るよい機会になるようです。これは、同じ役人仲間での交際ではなかなか得がたいものです。

その一つに、不況感覚の違いを感じます。モノを売っている同窓生は、「モノが売れない、不況だ」と嘆き、カネを貸し付けている同窓生は、「借り手がない、不況だ」と呟き、雑誌にかかわっている同窓生は、「手応えがない、沈んでいる」と声を落とすわけです。

この不況感が、私ども役人には概してよくわからないわけでして、新聞雑誌等で不況の実態を読んでも、いま一つ真に受け止めえないもののようです。学生時代のアルバイトの経験であっても、求人量、報酬額等から肌で好不況感を感得できたものでしたが、役人になった途端忘れてしまったのでしょうか。別にこの世は経済がすべてではありませんので、不況感覚不感症をことさら重大疾患とする必要はないのかもしれませんが、どうも片肺飛行の感は拭えません。

そんな同窓会にあっては、ともするといつの間にか役人系統だけで談笑という光景も見られるようで、これはさしづめ同じ業界仲間での情報交換といったところなのでしょう。

国の経済がうまく行かなかったイギリスが、逆に優れた経済学の業績を残すことになった例にならって言えば、不況感覚不感症患者は、生きた経済社会の動きを真に受け止めることなく過ごしてしまうのかも知れません。しかし、そうなってしまっては残念なわけでここはひとつ心してかかろうと思っています。

●**訂正**―67号裏表紙児童生徒の骨折は一三・五の誤りです。

『調査季報』は職員が自由に意見を発表し討論する行政研究誌です。「行政研究」への投稿も歓迎します。二〇〇字詰五〇枚以内。都市科学研究室まで（電話六七一―二〇二九）。

この「読者のページ」へもご投稿ください。市政、都市問題、自治体問題等、題材は自由。七〇〇字以内。

〈あとがき〉

西区役所の「地域老人問題研究協議会」は、同区の福祉事務所のケースワーカー、保健婦、老人クラブ担当の職員、老人ホームの指導員等が参加して、いわゆる横割りで地域の老人問題を考えていこうとしている。地域福祉係の一職員の発案によるものだが、相互の連絡調整の場としての役割を果たしている。今必要なのは、タテ糸を一本増やす仕事より耐久性のあるヨコ糸となる仕事だと思う。〈中川〉